
太陽の黒猫

もんかる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

太陽の黒猫

【Nコード】

N2760H

【作者名】

もんかる

【あらすじ】

魔法を使える黒猫『サン』は自分の主人を探して世界を旅してまわっている。そんな『サン』の猫らしからぬ猫としての出会いと発見のお話。一話完結型の小説です。

第一話「独りの女」

プロローグ

私は、代々昔から由緒正しきイギリス魔女に代々仕えているカレイド・サン・クルジャー家の末裔。エメラルドの目、尖った爪、真っ黒のショートヘア、そして自慢のピンと張った尻尾————何か変かね？

何も変な所はないはずだが。なぜなら私はどこまでも猫らしくない猫なのだから。

何故猫らしくないかと言えば、まず魔法を使う事ができる。これはこの家代々の特殊能力、血統書付きとも言えよう。そして私は人の言葉を知っている猫だ。もちろん喋ることなんて容易い。

普通の人から見れば私はかなり万能に近い存在だろう。そう、姿形以外は。

それが『太陽の黒猫』と恐れられている私なのだから・・・。

私の名はサン。

私の主人は当然魔女である。

彼女は突然私の日常から消え去ってしまった。

「ちょっと出かけてくるね」

その軽い一言が最後に聞いた言葉だったと記憶している。

彼女は一体どこへ行ったのか。

私も旅に出ようと考えた。

主人を探す旅。

生憎世界は広い。

ただの人間を探すならまだしも、魔女は世界中を飛び回る。イギリスの屋敷でジッと待っていた方が得策かもしれない。しかしそれでは私が退屈してしまう。

結局私は私の暇つぶしのために旅に出ることにした。

第1話「独りの女」

太陽の光が心地よい。

今日が休日だというのに人の通りが少ないこの道の塀の上は、遮るものがなくて静かで好きだ。

最近では日本の初夏の蒸し暑さが嫌になるが、今日にかぎっては風があるからか嫌にならない。

しかし、黒い毛皮というのはどうもいけない。太陽の光を吸収しすぎる。

確かに10分くらいは心地良いのだが、それを超えると暑く感じる。

「君は、捨て猫かな？」

突然の言葉に塀の下を覗くと水色のワンピースを着た女が一人、こっちを見上げて立っていた。

どうやら私に話し掛けてきたらしい。

私はすぐに視線をかえた。彼女に興味が湧かなかったからである。そもそもちよっと休憩をしていただけで、私は早く主人を探さなければならぬ。

「捨て猫なんですよ？首輪してないし」

彼女は勝手に話を進めている。

「私の家においでよ。ご飯あげるから」

立ち上がると思っていた私を、背伸びして塀の上へと手を伸ばし、簡単に抱き上げる。

「熱いね。なんでこんなに暑いのに日陰で寝てないのよ？」

抱き上げた私を見つめて彼女は言う。

だからもう移動しようとしていたというのに。

しかし私は抱き上げられても抵抗しなかった。ご飯を食べさせて

くれるというのだから、行かない手はない。野良の世界でご飯を手に入れるのは面倒くさいから。

私はそのままおとなしく彼女に従って、彼女の家まで連れて行かれた。

彼女の部屋は古びた『ペット禁止』と書かれたアパートの二階だった。

部屋の扉の横の表札には「吉田」と書かれているのを私は見た。そそくさと誰にも気付かれないように自分の部屋へと逃げ込む。ガチャリ

彼女が部屋の鍵を閉めて安心している姿を私は腕の中から覗き込んだ。

「ふう、これで大丈夫だね。あ、そうだそうだ、ご飯だったね。今準備するから待ってて」

そう言う彼女は私を降ろして、台所へと駆け込む。

日本の家屋というのは変わっている。玄関で靴を脱いでから中に入るシステムというのは欧米では考えられない。靴を脱ぐのなんてベッドの上くらいなものだ。私だって主人からベッドの上だけは乗っちゃいけないと言われていた。

私はその辺に落ちていたタオルで足を丁寧に拭いてから彼女の部屋を見渡した。

お世辞にも綺麗な部屋ではなかった。そして広くもなかった。こういう部屋の構造を1DKと言ったのだろうか。

とりあえず部屋中に服やら本やら下着やらが散乱していて、一見人間なら足をつくスペースすらないほどだ。

一体どこに身を置けばいいのか迷ってしまう。

「あ、その辺に適当に座ってて」

まるで人間を相手にしているような言葉。

私はちょうど私の大きさ分だけ何もない所を見つけて、そこに腰

を降ろした。

「ほら、商店街のくじ引きで当たった高級な猫缶だよ」

そう言いながら私の前に置かれたご飯は確かにおいしそうな匂いである。しかし私はすぐには食べない。やはり礼儀というか、彼女の承諾を得るまでは食べてはいけなさと感じたのだ。

私の口の中はもうすでに唾液が充満し、大洪水寸前の状態だ。

「ん？食べないの？召し上がれ。おいしいよ、たぶん・・・」

召し上がれの言葉を待っていましたと言わんばかりに私はご飯に食べついた。

「わぁ、お腹すいてたんだね」

彼女は目を丸くして私を見つめている。

やはり人間とは違い、一度ご飯を食べ始めてしまうと周りが見えなくなってしまうのが猫というものだ。

一瞬の内に食べ終えた私は、再び部屋を見渡して気付いたことがあった。

まず、彼女は学生であるということ。ベッドの脇のハンガーに最近この辺で見たことのある制服が掛かっていたからである。

次に、彼女は間違いなく一人暮らしということ。狭く散らかった部屋からは彼女以外の匂いを感じなかった。

そんなことを考えていると、彼女が私の横に座る。そして私を私の顔と彼女の顔が向かい合うように抱き上げて腕を伸ばし、ある一定の場所を凝視していた。

「あ、女の子だったんだあ」

その行為に関して、私は別に何も感じなかった。前にもやられた経験はある。その時に思ったのは、なんて人間は無礼な生き物なのだろうということだけ。

「君の名前を考えたんだけどさ、ビターでどう？ずっと男の子だと思ってたから帰り道にこれがいいやって思ってたんだけど、女の子でも全然普通の名前だよな？」

彼女は私をビターと呼んだ。

私にはちゃんとした名前があったが、それを言う必要もなかった
ので何も言わなかった。

「なんでビターかって言うと、今日初めて抱き上げた時にまるで溶
けそうなくらい熱かったイメージが強くてね、だからなんかチョコ
みたいだなあって思ったの。それで黒いしビターがいいって思った
んだよ」

彼女は私に力説してくれたが、人間というのは哀れだ。もし私以
外の猫ならば、全く理解できない話をしていることになるのだから。
しかし、彼女はえらくその名前が気に入ったようで、私にむかっ
てビターと連呼している。私は彼女の顔を見ていたが、飽きてきた
ので窓の外を見ることにした。

緑の少ないコンクリートジャングルの広がる景色。

さっきまで出ていた太陽はすっかりドス黒い雲に隠されてしまっ
ていた。

蒸し暑い空気が世界を支配する。しばらくすると夕立が降ってき
た。

私は激しく降り注ぐ雨を見ながら、ご飯をご馳走になるという自
分の選択が正解だったと確信した。

そして彼女の部屋の隅の方で静かに眠りにおちた。

彼女は急いでいた。恐らく学校なのだろう。制服を身にまとい、
青い学生鞆を持って、茶色いローファアを履いて家を出ようとして
いる。

「大人しくしててね。学校終わったらすぐに帰ってくるから」
そう言ってドアを閉めてしまった。もちろん鍵も。

私はもう一度部屋を見渡した。

倒れたゴミ箱が偶然目についた。

「死ね死ね死ね死ね死ね——」

そう書かれた手紙がグシャグシャにされて無造作に入っていたか

らである。なんて安易で低能な手紙だろう。

彼女はイジメにあっているのかもしれないと咄嗟に思った。

どうせ退屈だった私はそのことに若干の興味があったので、家を出て学校に行くことに決めた。

ドアの前に立ち、ドアを私のエメラルドの瞳が見つめる。

ガチャリ

ガチャ

鍵とドアがまるで自動ドアのごとく開く。このくらいの魔法なら寝ていても出来る、などと自信を持って言える。

私は家を出て鍵を同じ容量で閉めてから学校へと向かった。

外に出て感じたことは、昨日の雨はやはり夕立だったということ。都会のくせに空は澄んでいて、私を飲み込んでしまいそうなほどの青だった。

学校の場所はすぐにわかった。彼女が出て行ってから間もなかったのも、彼女の学校の学生が登校しているのをすぐに見つけたのだ。その学生を塀の上から追った。

学校は割と近くにあり、学校名を見てふと思い出す。

一昨日くらいだろうか、この学校の評判を耳にしたことを。

「あそこの高校は毎年T大合格者を何人も輩出する有名進学校なのよ。なんかね、地方からも、こっちの方に出てきて一人暮らしとかしてまで通う人がいるらしいわよ。すごいわよねえ」

小太りのおばさんが世間話をしているのを耳にはさんだだけだったが、彼女もおそらくそういった事情の生徒の一人なのだろう。

学校内に入ると、校舎内が見えそうな適当な木を見つけて登った。そしてようやく彼女を見つける。彼女は教室の真ん中辺りの席で、つまらなさそうに険しい顔をして授業を受けていた。

数分後に私は確かに見た。彼女の後ろの方から彼女に向かって紙くずを投げる茶髪の女の姿を。

彼女はつまらなさそうにしていたのではなく、嫌がっていたのだ。周りの生徒は何も言わない。先生は授業に熱中していて気付いて

いない。いや、気付いていても見ないようにしているようだ。

人間とはなんとも哀れな生き物か、と私は思う。

興味があったとはいえ、見たくもない人間の愚かさ、あの手紙の事実を垣間見て私は気分が悪くなった。

そして私は学校の全ての授業が終わる前に帰った。彼女の部屋に。

彼女が部屋に帰ってきたのは、もう青と黒の世界が赤の世界を飲み込もうとしている時だった。学校が終わったらすぐ帰ると言っていたわりには遅すぎる帰宅。

「ただいま・・・」

言葉に今朝ほどの元気がみえない。

私は彼女の足元の変化に気付いた。学校の上履きを履いている。茶色いローファーはどうしたのか。例の茶髪の女に隠されでもしたのか。

彼女は私の横に重い腰をゆっくりと降ろした。衣服が下敷きになっていたが、気にしている様子はない。

「私ね・・・学校が楽しくないの」

おもむろに猫に向かって話し出した。もうすでに泣きそうな顔である。

「私ね、ある女の子のグループからイジメを受けてるの。今日もね、授業中に紙くずを投げられたり、休み時間、私がトイレに行ってる間に机に悪口が書かれてたりしたの・・・」

それは知っていた。私が目撃した出来事である。

「でもね、そんなのはまだいいの。今日、ビターに会いたいから早く帰ろうと思ったら・・・」

彼女の瞳には溢れんばかりの涙が滲んでいた。

「私の靴がなくてね、手紙が入ってたの・・・。手紙には何か地図みたいなのが書いてあって、それでその通りに行ってみたら、また手紙が落ちてたの」

その話のオチが私には見えていた。上履きで帰ってきた彼女がここにいるから。

「何回目の手紙だったかは覚えてないけど、その手紙にはただ『バカだね』って書いてあるだけだった。そこで私はやっと気付いたの。隠された靴は帰って来ないんだって」

鼻声が散らかった部屋に響く。

「私ね、田舎から勉強したくてこっちに出てきたばかりで、まだ友達もないし、先生に言ったらもっと酷い事するって脅されたの。だから、誰に相談すればいいのかわかんなくて、親にも心配掛けられないし・・・」

彼女はそれから泣いているだけだった。私はそれを見ていることしか出来なかった。いや、正確には見ているという選択肢を選んだ。今は、ただ見ているだけ・・・と。

彼女が私を拾ったのは、独りぼちという寂しさを紛らわすためだったのかもしれない、と私は静かに思った。

翌朝、彼女は笑顔で私に言った。

「今日こそは早く帰ってくるからね」

そう言って家を飛び出す。

その顔は確かに笑顔だったけど、頬がまだ赤く、目も充血しているように私には見えた。

私は再び学校へと向かった。そして再び同じ木の上から彼女を眺めた。

気づいたことは、彼女の隣の席の女がたまに彼女を心配そうな目で見ている、ということ。

ちょっと体育会系っぽいショートヘアの女は、クラスでも中心人物らしく、クラスをまとめ上げていた。

私はそのショートヘアの女を利用することを考えついた。見た目は喧嘩も強そうだし、ちょうどいい。

そして、そのショートヘアの女が昼休みに渡り廊下を歩いているのを見計らってその女の目の前に飛び出た。

「ん？猫？どうしたのさ、ここはお前が来るとこじゃないよ」

しゃがんで私に目線を合わせてから優しい声で話し掛けてくる。

私は女の目を見た。私のエメラルドの目が女の目を見つめる。そして、女に魔法を掛ける。

『今すぐ下駄箱に行きなさい。そしてあなたがすべきことをしなさい』

私はショートヘアの女の脳に直接この声を響かせた。

女は焦点が合わないままの表情で、下駄箱へ向かって走り出した。魔法を掛け精神に干渉した時あの女の心理を読み取ったが、ずっと彼女のことを助けたかったようだ。しかし、そのきっかけがなかった。そして勇気がなかった。

だから私がその欠けていたきっかけと勇気を女に与えたわけだ。

私はショートヘアの女の後を追って下駄箱へ向かった。

人気がない下駄箱では茶髪の女とその部下たちがちょうど彼女を取り囲んで楽しんでいる最中だった。

彼女はただ怯えた顔で縮こまっている。その瞳には涙すら滲んでいる。

そこにショートヘアの女が自慢の脚力を生かして走ってきた。

「あんたたち！吉田さんになにしてんの？！」

ビシッと指をさして仁王立ちをする。

私は物陰からその様子を見ていた。

「げっ、橘かよ。お、お前こそどうしたんだよ。別に私たちは何もしてないけど？」

茶髪の女が他の女子に同意を求めながら言う。

「もう先生にも言ったんだからね！多分もうすぐ来るよ」

「あんたチクツたわけ？」

「そうよ、当然でしょ。なんでこんなことするのよ？」

「なんでって、別にあんただって今まで何も言わなかったじゃない。大体、ちょっと成績がいいからって調子に乗ってる吉田が悪いのよ」茶髪の女自身が意味わからないといった困惑した表情で訴えている。筋が通っていないのを自分でもわかっているようだ。

つまり、それは誰でもいいからとりあえず誰かに自分の不満を形としてぶつけたいがための言い訳であって、その相手としてたまたま友達のいない彼女が狙われたわけだ。

「意味わかんないでしょ！ほら、早くどっか行きなさいよ！先生来ちゃうわよ！」

ショートヘアの女、もとい橘が茶髪の女たちを威嚇する。

「覚えてなさいよ吉田！かならず仕返ししてやるんだから！！」

茶髪の女のグループは彼女にそう言い放つとどこかへ走って行ってしまった。

「大丈夫？」

橘が怯えている彼女の肩に手を乗せる。

「あ、ありがとう」

彼女は未だ状況がよく飲み込めていないようだった。

「ちなみに先生にチクッたってのは嘘だから。でも、これからでもいいから先生に相談したほうがいいと思うよ」

「あ、あの、どうして助けてくれたの？」

彼女は恐る恐る橘の目を見て訊く。

「本当は、私もなんでここに来たのかよくわかんないんだけど・・・でも、今までずっと黙って見ててゴメンね。勇気がなかったんだ、私」

「ううん、本当にありがとう。私、どうしたらいいかずっとわかんなくて、友達もいなかったし・・・。だから、すごい嬉しいの」彼女が学校で涙を浮かべながらだけど、ちゃんと笑っている顔を私は、いや橘も初めて見ただろう。

「あんただってそういう顔できんじゃん。それに、私がもう友達だ

よ」

私はその言葉を聞いて、ようやく安心していった。もう大丈夫だろう。

私はただ彼女にはお世話になったからお礼をしただけ。そう、ただの礼儀だ。

ふと私は自分自身の目的を思い出した。

そういえば主人を探さなければいけない。

私はその場で一声「ニャー」とだけ鳴いてその場を後にした。

その日は特に暑かった。

私にとってセミの鳴き声も耳には慣れた音となっていた。

あの日以来、私の前からビターは姿を消した。

最後にあの場で聞こえた猫の鳴き声はきつとビターの声だったのだと私は思う。

「あのね実はあの時、下駄箱に向かう前にね、黒い猫に逢ったの」
冷房の効いた教室で、橘さんの声に私は反応する。

「その猫を見た瞬間になんか嫌な予感がしてね、それで下駄箱に走ったのよ」

橘さんはオーバーなアクションで私に説明してくれる。

「それで私を助けてくれたんだ」
私が返す。

「そーゆーこと！あの黒猫はきつと運命だったんだね」
自身満々の顔で橘さんは言う。

「うん、私もそう思う！きつと幸運の猫だったんだよ」
あの出来事以来、私には友達ができた。橘さんはもちろん、橘さんの友達も私と話をしてくれるようになったし、遊びにも誘ってもらえるようになった。

一方、私をイジメていた茶髪の北村さんはもう茶髪ではなくなっ

元々先生に茶髪ということで目を付けられていたのだけれど、私の件でついに呼び出しをくらったのだ。そして、黒髪にして学校に来た時はクラス中がビックリしていた。

「・・・ごめんね」

黒髪に染めてクラスに入ってきた北村さんは、まず私にそう言った。私は頷いただけだったけど、きつともう北村さんからイジメられることはないだろうなって思った。

今では一番の友達がなんと北村さんだったりする。

そして私は時々思う。

ビターはきつと魔法使いで、ご飯のお礼に私を助けてくれたのだ、と。

そして今もビターは世界のどこかで誰かを助けているんだろうな、と。

第二話「命の宝石」

石畳の道は私にとって歩きづらかった。

霞がかった街並みに、まだ顔を出さない朝日が差して美しい朝焼けとなる。赤いレンガの街並みが一層赤を強くしている。

ロンドンの街はまだ起きていなかった。赤い二階建てバスもまだ運行していない。

しかし、通りを大勢の黒い服を着た人達が走っていた。この格好は間違いなく警察である。

表通りを堂々と歩いていた私はその人達が煩わしかったので、裏路地を歩くことにした。

しばらく歩いていると、上空から人が・・・なんと落ちてきた。

ドサツツ！

私はとっさにその場から一歩飛び退き、低い体勢をとった。

「いててて・・・」

見事に着地を失敗した人間は二十代半ばあたりで冴えない顔の男だった。そして私と目が合う。

「ん？黒猫か・・・これは逆にツイてるかもな」

男はそう言いながら、近くの物陰に身を縮めた。隠れているようだ。

黒猫を見てツイてるとは妙である。

「ほら、お前こっちこい。ご飯やるよ」

ポケットの中からパンを取り出して手招きをしながら言う。

私は特にお腹が空いていたわけではなかったが、この男に興味が湧いたので頂くことにした。

パンを頬張る私を見て男が呟く。

「こっちの方にお巡りが来たら、ミャーって鳴いてくれないか？」

どうやらこのパンは取引の材料だったらしい。猫との。

猫にそんなことをお願いするなんてよっぽど追い込まれている状況なんだなと私は思い、無言で快諾することにした。

この男は間違いなく警察に追われている。

「さっき、こっちの方で物音がしたぞ！」

若い警官の声。

どうやら仕事の時が来たらしい。私は出来るだけ野良猫っぽく品のない低い声でミャーと鳴いた。

男は本当にやってくれるとは思わなかったのか、自分の目をまん丸にして私を凝視していた。

数時間後、警察の気配がなくなると男は動いた。

「お前すごいな、本当にツイてやがった。もっと飯を食わせてやるから俺の家に来い」

そう言って私を抱き上げて、猫でも迷子になる裏路地を通って男の家に戻った。

もう朝日が昇り、すでに霧は晴れ渡っていた。

男の家は裏路地から入る三階建ての怪しげなアパートだった。

部屋は意外と綺麗、というか物がなくてさっぱりと綺麗だった。

四角い部屋の隅にベッドが一つあるだけで、広い部屋に感じたが、実際はそうでもなかった。

むしろ、こんなさっぱりした部屋で、本当にご飯をくれるのかが心配になってきたくらいだ。

「ちょっと待ってろ。このベッドの下に色々とお宝があるから」

そう言ってベッドの下から取り出したのは、ベーコンだった。そしてフライパン。

それらを玄関の横にあるキッチン、もといコンロが置いてあるだけの所に持っていく。

部屋の中に肉の香りが漂った。

さらにベッドの下にあったお皿を取り出して、男はこんがりと焼けたベーコンをお皿に乗せる。

「ご馳走だろう？」

私は特にグルメな猫ではないのでコレでも構わないのだが、コレがご馳走だとは微塵も思わなかった。

しかし食べてみると、まさかベッドの下にあったものとは思えないほどおいしかったので、コレをご馳走と認定してもいいかなと密かに思った。

「俺はね、実は泥棒なんだ」

男がおもむろに話し始める。私はわかっていた。警察に追われるほどのコトといえば、殺人か窃盗、もしくは誘拐だ。それも、あの警官の量から言って半端なものを盗んだわけがない。恐らく高価な宝石やらアクセサリーの類だろう。

私はロンドンという街をよく知っている。何故なら、私の住んでいた屋敷に最も近い大都市だからである。

この街は高価な物で溢れかえっている。そのため、窃盗などの事件が頻繁にあるのだ。

「俺は一つの宝石を盗んだ」

そう言うのとポケットから袋を取り出して、中身を取り出す。

私の目の色と同じ色の宝石。

透き通っていいそうで透き通っていない。全てを吸い込んでしまいそうなほどのプレッシャー。これは『命の宝石』と呼ばれるエメラルドだ。

「この宝石はな、なんでも一つだけ願いを叶えてくれるっていう魔法の宝石なんだ」

男の表情は笑っている。しかし、どこことなく猛烈なプレッシャーを感じているような引きつった笑顔だった。

「願いを叶える代償として、自分の命を捧げなければいけないってのが困ったものなんだがな」

その通りである。この宝石は魔法使いなら誰でも知っている邪悪な魔法の掛かった代物だ。

「俺にはな、たった一人だけ家族がいるんだ」

男が一呼吸、間を取る。そして猫にむかって真剣に話始めた。

「妹なんだけどな、医者からは恐らくもう治らないと言われている病気なんだ。もちろん、手術をすれば治る可能性もある。しかし、俺たちにそんな金はねえんだよ。あいつは生まれてこのかたまともな生活というのを体験してない。シヨツピングすらしたことがないんだ」

近くのビッグベンの鐘が響き渡る。

「だから、俺は死んでもいいから妹を助けてやりたくてな。それでこの宝石を盗んだんだ」

良い話だ。人間だからこその考え方だが、私は嫌いじゃない。

「もう一つ、俺はやらないといけないことがある」

男は窓から見えるビッグベンの時計を見つめる。

「今夜、俺は町外れの大きな図書館の警備の仕事があるんだ。仕事のパトロール中に、ある本からこの宝石についてを調べなければならぬ。この宝石を使うには呪文が必要なんだ。だからそれを見つけてさなければならぬ。もちろんこの宝石を使ったからって、本当に願いが叶う保証はどこにもないだけだな」

何か魔法の掛かった道具というのは、呪文をきっかけにその魔法が発動するパターンというのが多い。このエメラルドもその一つなのだろう。

男が再び私を見る。

「何かの縁だ。もし良かったら手伝ってくれねえか？」

普通の人間が猫にここまで本気でお願いするとはおもしろい。

恐らく本人は願掛けのつもりなのだろう。私はその言葉に答えてミヤアと甘い声で鳴いた。

ビックベンの時計はあと一分で正午を指そうとしていた。

街の郊外にその病院はあった。いたって普通の病院だが、どちらかと言えば診療所と言った方が正しい気もする。

男は私にこの部屋で待ってろとだけ言って、部屋の外に出て行ってしまった。

私は当然大人しくしているはずもなく、開いていた窓から外に飛び出し、男の後を尾けていくことにした。

男はその病院に入っていく。

私はさすがに病院ということで、衛生的に入るのが申し訳なかったので外からまわり、男の声を探した。すると、病院の一階の一番奥の部屋から男の声がした。

「具合はどうだ？」

恐らく妹に話し掛けているのだろう。

私は窓の外から様子を覗う。

「うん、大丈夫だよ。お兄ちゃんが毎日来てくれるから、調子いいよ」

妹は全身真っ白な肌をしていて、年齢はおよそ十代半ば。ちょうど男と十歳くらいの年の差がありそうな感じだ。そして男とは比べ物にならないくらい綺麗な顔をしている。

「あんな、お兄ちゃんが絶対にリウを治してやるからな！」

男は改まった表情で妹、もといリウに言う。その表情はどこか強張っているようにも見えた。

「お兄ちゃん、お願いだから無理しないでね？お願いだから・・・」
リウの目には薄らと涙が滲んでいた。

「リウスターチさん、体温を測る時間ですよ」
空気を壊すように看護婦が入ってくる。

「それじゃあ、今日はこれで帰るな」

男はもう一度リウの顔を、まるでその目に焼き付けるように見つめてから、病院をあとにした。

男は警備員の姿をしていた。

そして図書館内のパトロールしていた。

私は暗い館内に身を隠しながら男を見ていた。

男は本を粗方絞り込んでいたらしく、ある一冊の本を迷わずに本棚から抜き出して、懐中電灯で照らした。

「我、私の全てを捧げて願う。その邪悪なエメラルドに誓って・・・」

男が呟く。

呪文というにはあまりに粗雑なものだと私は感じた。

男はもう一度復唱してから本を元の場所へ戻した、その時だった。

ジリリリッリリリリッリリッリリッ！！！！！！

館内に鳴り響く警報装置。

他の警備員たちが現場へと急ぐ足音がする。

一体どんな仕掛けで警報が鳴ったのかわからずに男は焦っていたが、私が一声ミャーと力強く鳴くと、

「すまない、任せた！」

と言って警備員と鉢合わせにならないように別のルートで逃げた。

私はやれやれと思い、その本のある本棚の目の前に座り込んだ。

1分もしない内に他の警備員達がやってきた。

私は懐中電灯に照らされてその姿を現した。

「なんだよ、猫か。ったく、人騒がせだな」

警備員達は怒りの目で私を見る。

私は男達の目を見つめた。このエメラルドの瞳で。

すると男達の動きは止まり、まるでこの空間の時間だけが止まってしまったかのように、その場が凍り付いてしまった。

私はその間に現場から離れ、男を追った。

警備員達にはほんの少しの間、止まっただけでもらうことにしたのだ。

私が急いで男の家に戻ると、男はすでにエメラルドの宝石と睨めっこをして床に座っていた。

男が人生を賭けようとしている瞬間だった。

窓の外のライトアップされたビッグベンの短針は、ちょうど12と1の真ん中にあっただ。

「これで、いいんだよね？」

私にむかって言う。私はその場に座り込んで男を観察していた。

「よし」

男は一度とても深い深呼吸をしてから、手にもっているエメラルドの宝石を睨む。

「我、我の全てを捧げて願う。その邪悪なエメラルドに誓って・・・俺の妹、リウスターチの病を・・・命を助けてください！」

エメラルドの宝石が一度だけ鋭く光った。

私はその光を何故だか眩しく感じなかった。

男は未だ、手にエメラルドの宝石を持って座りこんでいた。男の顔は放心状態だ。

「お、俺、死んでないぞ？おい、俺死んでないぞ！！」

男は歓喜の雄叫びを上げて私を抱き上げる。

そして、走り出した。病院へと。

この時、私は嫌な予感がしてならなかった。

病院に着いた男は、外からまわってリウの病室の窓を叩く。

「ん、なにかしら」

寝ていたリウは窓の外にいる笑顔の自分の兄に気付いた。そして窓を開く。

「どうしたの？こんな遅くに」

男は窓を乗り越えて病室の中へ入る。

「リウ、調子はどうだ？」

笑顔を絶やさずに訊く。

「え？あ、そういえばすぐ楽かもしれないわ」

男はリウを強く抱きしめた。

「もう、大丈夫だよ！お前は助かったんだ！」

「お、お兄ちゃん？」

リウは不思議そうな顔をして抱きしめられている。

そして力強く言う男の言葉は震えていた。

「もう、普通の生活をできるんだ！シヨッピングだって、レストランの食事だって、普通の散歩だって・・・」

ボタン！！

男の言葉が終わる前に病室のドアが勢い良く開かれた。

バンツバンバンツ！！！！！！

そこには拳銃を構えた警察が数名立っていた。その銃口からはすでに煙が立っている。

男の背中からはまるで小さな運河のように血が流れ出していた。

「えっ？え？え？え？え？」

リウは訳がわからなくなっていた。目の前で起きた現実が理解できていなかった。

男は撃たれた。

これをどこかで予想していたのかもしれない。窓の外で見ていた私と思う。

男が倒れると同時にリウの叫びが病院中に激しく木霊する。

これで、男の望み通りになった。『命の宝石』を使った代償。

『命の宝石』は、使ったものの望みが叶ったのを、使った本人が

認識した時点で、自然に死を与える。

倒れている男の顔は笑っていた。幸せそうに……。

あの時私は何が起きたのかわからなかった。

目の前でお兄ちゃんが撃たれた。そして倒れた。

「お兄さんなんだけどね、高価な宝石を窃盗してね。それで、気の毒だけど指名手配になってたんだ。それに街外れの図書館での不審な行動。警察としては、捕らえたかったんだが、君を抱きしめている姿が、我々には彼が君を襲っている姿にしか見えなくてね。だから撃ったんだ」

少し太った警察のおじさんが話してくれた。ちょっと言い訳がましくて、私は聞きたくなかったけれど、事実を知る義務がある私はしょうがなく聞いていた。

それまで病院の外にあまり出たことのなかった私はそんなことになっていたとは微塵も知らなかった。

あの夜以来、私の体の調子は良くなり、なんと病気が治ってしまった。医者は奇跡だと言って騒いでいたけれど、私はきつとお兄ちゃんが治してくれたんだと信じている。あんなことがあって、今でも精神的に辛いのは確かだけど。

もう1つ、あの夜、私が絶叫し終わった頃に猫の鳴き声が聞こえた。パニック状態の私にもなぜだかその声だけは耳に届いた。まるでお兄ちゃんを弔っているような、そんな感じの寂しい鳴き声だった。

私はこれからについて考えた。

私はこれまでずっとお兄ちゃんの迷惑になりたくないと思って生きてきた。私の所為でお兄ちゃんが辛い思いをするのが嫌だった。

なんで、死んでしまったの？私のせい？お兄ちゃん……。

でも……起きてしまった事を後悔している場合じゃないのはわかってる。

せっかくお兄ちゃんが生かしてくれた命だから、大切に、そして有効に使っていこう。病院にいた頃、ずっと看護婦という仕事に憧れていた。というか、看護婦という仕事しか知らなかったというのも1つである。お医者様は嫌いだったし。

私はその小さくて世間知らずな夢を叶えようと思う。お兄ちゃんのために。そして、これから失われようとしている尊い命のために・
・。

第三話「別れの豚」

アメリカという国は広い。

欧州諸国では考えられない大きさだ。もちろんロシアを除いて。都会の方は空気が汚れていて私好みではないが、少し田舎の方へ行くと一面が草原となっていて、牛やら豚やらが飼われている。空気がおいしい。

この辺に來ると民家が少ない所為か、まず食事に困ってしまう。

『お前、「太陽の黒猫」だろ』

荒れたでこぼこ道を歩いてた私に、後ろから声をかけてくる白い猫が一匹。

『私の通り名を知っているとは光栄だ。あなたは？』

私は首だけ後ろに向けて、歩くのはやめずに白猫に猫の言葉で答えた。

『やっぱりそうか。そのエメラルドの目を見てそうじゃないかと思っただ。俺はジャン。この近くの牧場で飼われている猫さ』

ジャンと名乗った白猫は説明口調で私に言う。

『私はサン。私を見て何も思わないのか？』

私は歩くのをやめて、体ごとジャンの方へと向けてから訊く。

『サン・・・か。確かに「太陽の黒猫」といやあ、猫の間では怖がられてるようだが、俺はそうは思わないだけさ。・・・サンは腹が減ってないか？よかったらご馳走するぜ？』

『・・・何故？』

『せっかく「太陽の黒猫」に逢えたんだから、もてなしくらいするさ』

私は首を傾げたが、とりあえずジャンの言う通りにして彼の牧場についていくことにした。

牧場は小さかった。それ以前にボロボロだった。

この辺の大きくて綺麗な牧場に目がなれていた所為か、ひどくこの牧場が哀れに思えてくる。

『まあ、見た目はボロボロだけど、ここの主人はとてもいい人なんだ。動物に優しくてさ』

見渡すと、小さい囲いの中に豚が一匹とボロボロのぎりぎり雨が防げるくらいの鳥小屋に鶏が五羽いるだけ。牧場と本当に呼んでもいいのかと思うくらいの動物の少なさ、そして施設の規模の小ささだった。

『これは、一般人の趣味じゃないんだね？』

念のために訊いておく。

『もちろん。ただ、ここの牧場は見ての通りとても貧乏なんだ。今いる豚もその内出荷されるだろうけど、主人が溺愛していてね。エサも不十分だし、なかなか出荷しないんだ』

悪循環。ただそれだけを私は考えた。

『あ、あそこにいるのが俺の主人だ』

ジャンの視線の先には太った穏やかな顔をした男が立っていた。ジャンの方を見ている。というか、一緒にいる私を見ているのかもしれない。

ジャンの主人の足元まで来て止まる。

『ジャン、おかえりなさい。お友達かな？ すぐにご飯をだしてあげよう』

その優しい表情が印象的だった。本当に動物のことが好きなんだとすぐに私は認識できた。

そしてジャンは「ご飯」という言葉だけを理解したのか、
『な？ いい人だろ？』

と言う。

『あの人はここの牧場長なんだけどさ、独り身でさ、たった一人でこの牧場を経営してるんだ』

例え一人でも十分にやっていけそうなくらい寂しい施設だったが、

『それはすごいね』

と表向きでは返した。

すると、ジャンの主人がエサを持って歩いてきた。持っていたのは鶏肉だった。

『昨日までは六羽いたんだよ』

ジャンの解説が入らなくても想像はついた。

「お食べ、この鶏肉はおいしいぞ」

確かに脂がのっけていておいしかった。私とジャンはペロリと鶏肉をたிரげる。

牧場長が私の目を見つめて言う。

「綺麗なエメラルドの目だね。それに女の子か。ジャン、ガールフレンドを連れてきたのか？」

ジャンは主人に誉められていると思ったのか、甘い声で鳴く。

『私は別にジャンのガールフレンドではないからな』

私はつい口に出してしまった。突然の私の言葉にジャンは不思議そうな顔を私に向ける。

『・・・お前、人間の言葉がわかるのか？』

私はジャンの顔を見ず、無言で頷く。

『そういえば「太陽の黒猫」は魔法使いだったもんな』

どこで手に入れた知識かは知らないが、「太陽の黒猫」が世間ではどういう認識になっているのか少し疑問に感じた。

『そうだ、魔法使いならさ、この牧場を助けてくれよ』

私は一瞬怪訝そうな顔をしたのかもしれない。

『・・・なんて、うまい話はないよな』

私の返事を聞かずにジャンは頭を垂らして残念そうに言う。

『私はまだ何も言ってないだろう？』

ジャンの頭が持ち上がり、私の目を見つめる。その目はどこか希望に溢れているようなキラキラとした目だった。

『頼む！俺は主人のことを助けたいんだ』

『考えておくよ』

とだけ言って、私は一匹で周辺の散策に出かけることにした。
汚染されていない澄んだ青の空と、それが1つの立派な色として
確立した白い雲を眺めながらぷらぷらと歩いていた。

随分長いこと歩いていた。

そしてそこに主人と豚がいるのを発見した。

「ああ、なんて可愛いヘロン。君にもっとご飯をあげたいんだが、
どうもうちの牧場にはお金がないんだ」

主人がヘロンと呼ばれた豚の頭を撫でながら言う。

『ねえねえ、ご飯食べたいな』

豚がブーブーと鳴く。

「よしよし、わかってくれたんだね。どうやったらお金が手に入る
んだろうなあヘロン？」

『今日のご飯は何なの？』

当然ながら、主人とヘロンの会話はまるで噛み合っていないかった。
私はその光景がえらくおもしろかったのだが、反面、気の毒でも
あった。

いっそ主人を出荷したほうが儲けられるのでは・・・なんて考え
たが、冗談にならないので心の奥にしまうことにした。

主人がヘロンの元を離れた時、入れ違いに私はヘロンの元へ歩い
ていった。

『やあ、サンだね？ ジャンから話は聞いてるよ。この牧場を助けて
くれるんだってね？』

ジャンの中ではすでにそう決まってしまったらしい。

『そうだな、君がもっと太っていて、もっと脂がのっていて、もっ
と見た目が良かったら、この牧場は再建できるかもしれないのにな』
私は頭の悪そうなヘロンに嫌味口で言う。

『・・・そうなんだよ』

急にヘロンの声のトーンが下がる。

『・・・僕がいけないんだ』

私は悪いことを言ってしまったと思い、

『いや、君が悪いわけじゃないだろう？』

と誤魔化すが、

『サンは魔法使いなんだよね？お願い。僕のことを太らせてよ。僕に脂をのせてよ。僕の見た目をよくしてよ！』

私は黙っていた。

『僕はね、人間の言葉はよくわからないけど、ご主人が僕のことを愛してくれているのはすぐわかるんだ。だから、ご主人のためになるんだったらこそ、僕は出荷されるべきなんだ』

ヘロンの本心の気持ち私私の心の奥に伝わってきた。

『ねえ、僕に魔法を掛けてよ。お願いだよサン！』

私は落ち着いてゆっくりと答えた。

『・・・駄目。私は君には魔法を掛けない』

冷たくあしらう。

しかし私の中に熱いものが込み上げてくるのがわかった。

ふと空を見上げると、山陰に沈もうとしている太陽があるのがわかった。

黄金の草原の中で、黙って私とヘロンはオレンジ色に染まっていた。

黒くて艶のあるロングの髪の毛。ふっくらとした唇。抜群のスタイル。整った顔。エメラルドの瞳。そして白いブラウスに黒いスーツ、黒いヒールを履いたセールスレディ風の女が、小さなボロボロの牧場の小屋の前に立っている。

私は、私自身を人間として変化することが出来る。もちろん魔法で。

牧場の小屋で一晩過ごした私は考えた末、結局この牧場を助けることにした。

「なにか用ですか？お嬢さん」

主人が出てくる。

「こちらの牧場は酷く傷んでいるようですが、経営の方は大丈夫なんでしょうか？」

私は一度髪の毛をサラリとなびかせて続ける。

「あなたがこの牧場の牧場長でいらっしやいますね？」

主人はキョトンとした顔をしている。私のエメラルドの目に魅入られているような表情だ。

「はあ、そうですが・・・どちらさまですか？」

「私はソーラーガイダンス社のサン・ブラックと申します。我が社は動物の飼料を研究している会社です。最近、新しい飼料の開発に成功いたしました。こちらがその商品です」

そう私が言って小さな袋を取り出す。

「こちらは試供品となっておりまして、我が社では現在そのモニターを募集しております」

小さい袋を主人に渡す。

主人は袋を眺めながら、

「これだけですか？」

と私に聞く。

「はい、出荷する前日の晩御飯に、一つまみだけ普段使われている飼料に混ぜていただければ結構です」

「するとどうなるんだ？」

主人は私の目を見つめてその話に食いついてくる。

「それは、使ってみてからのお楽しみです。もちろん損をさせるようなことはございません。それは、我が社のイメージにも繋がることなので」

主人が再び袋に目を戻す。

「どうでしょうか？是非あなたのような動物をとて愛している方に使っていただきたいのですが」

私がとどめの一言を言う。

その後、少しの緊迫した間があった。

「・・・わ、わかりました。モニターの募集でしたね？その話受けさせていただきます」

主人は少し考えつつも、モニターの話を快諾してくれた。

「ありがとうございます」

私は営業スマイルと営業お辞儀をする。

「それでは、もう一度だけ確認させて頂きます。その袋の中身を、出荷前日の晩御飯に一つまみだけ入れていただければ結構です。一つまみ以上は絶対に使用しないでください。絶対にですよ」
念を押す。

「三ヵ月後にもう一度訊ねさせていただくので、その時に効果のほどを教えてください」

私はそう言って主人のでこぼこの手と握手をした。

私は失礼しますと言って牧場を離れた。

一度だけ振り向いてみると、主人の顔は未だにキョトンとしてこちらを眺めていた。

『さつき、すぐく美人な女の人が主人に会いに来たんだぞ』

ジャンが元の姿に戻ってきた私に知らせてくれる。そして私は訊ねる。

『それでどうしたんだ？』

『よくわからなかったんだけど、きつとご飯の話をしてたんだよ。』

なんか、小さい袋を受け取っていたし』

『小さい袋？ご飯の話なの？』

私は白々しくジャンに訊く。

『ああ。きつと魔法の粉みたいのが入ってるんじゃないかな』

ジャンはワクワクしていた。

私はそんなジャンにただ相槌を打って、ヘロンの元へ行った。
そこには主人の姿もあった。

「なあ、ヘロン。私はどうすればいいんだろうか」

主人は悩んでいた。さっきもらった飼料を使うということはヘロンを出荷しなければならぬということ。

「ヘロン……。お前が生まれたのはもう二年も前の話になるんだな。その時はまだ他の家畜もいたな。ヘロン……。もしお前が高く売れたなら他の家畜を新しく買える。しかし、ヘロンがいなくなる。私は、私は耐えられないよ。ヘロンがいるからこの牧場は明るいんだ。ヘロンがいるから私は独りでも笑っていられるんだ。ヘロン……」

ヘロンも人間の言葉はわからなかったが、どうやら状況を飲み込んでいるらしい。

『ねえねえ、もっと笑ってよ。僕ね、ご主人のためなら出荷だって怖くないんだよ。ほら、笑ってよ』

人間にはブーブー鳴っているだけに聞こえただろう。しかし、主人の目には涙が溢れていた。

「ヘロン……。私はヘロンと離れたくないんだ。私は……………」

主人が泣き崩れる。

『ねえねえ、ご飯をちょうだい！僕、もっと太らないといけないんだ。ほら、泣いてないでご飯をちょうだいよ』

ヘロンが鳴く。いや私には泣いているように見えた。

『ねえ、ご主人？僕はご主人のことが大好きだよ。だから泣かないで。僕のために涙なんて流さないで……。』

主人はヘロンを強く抱きしめた。

「ヘロン……。明日……。私と……。お別れだ。それでも……………いいね？」

涙目、鼻声でヘロンに訊く。

『僕は、ご主人のために……。何でもいいから役に立ちたいよ！』
ヘロンは一際大きく鳴いた。

その夜、主人は袋を取り出して飼料に一つまみだけ粉を落とした。本当にこれだけで大丈夫なのかと思ったのか、もう一つまみ分だけ粉をつまむ。

「一つまみ以上は絶対に使用しないでください」

主人の脳裏に私の言葉がよぎったのだろう。客観的に見てもわかった。

指でつまんだ粉を再び袋の中に戻す。

主人はそこご飯をへロンにあげて、食べ終わるまで眺めていた。

そしてその晩、主人はへロンと同じ豚小屋で一夜を明かした。

その日の星空は、いつになく切ない黒をかもしだしていた。

主人が目覚ますと隣にいたへロンを見て驚いた。

そして同時にへロンも驚いた。

「『太ってる！！』」

言葉は違えど声を揃えて叫んだ。

へロンの姿は一日で変貌していた。

ぷっくりと太った胴体に脂ののっついような肌の弾力。そしておいしそうな見た目になっていた。

「なんてことだ」

主人は目を丸くしてへロンを見ていた。

『やったやった！太ったぞ！ほら、ご主人！僕を見て！この太った姿を見て！』

へロンは大はしゃぎに鳴きつづけた。

私は主人に渡した魔法の粉の効果を確認して安心していた。あの粉にはもちろん私の魔法が掛かっている。単純に太る魔法ではなく、主人から家畜への愛情を条件に発動する魔法だ。

昼過ぎに仲介屋、別名解体屋が牧場にトラックでへロンを迎えに

来た。

「ヘロン、お別れだな。今まで私に勇気をくれてありがとう」

主人は一滴涙を流す。一度だけ強くヘロンを抱きしめた。

『お別れなんだ。迎えがきたんだ。ご主人、僕を大切にしてくれてどうもありがとう。こんな僕でもご主人の役に立てたかな？』

ヘロンは状況を把握しているのか、その言葉を鳴いた後は静かにしていた。

主人は離れ、ヘロンはトラックの荷台へと積まれた。

ヘロンを乗せたトラックが発券するためにエンジンを掛ける。

私はこっそりそのトラックに乗り込んだ。

その様子をジャンだけが気付いていた。

『サン、行ってしまうんだな？ヘロンに魔法をかけてくれてありがとう。主人を助けてくれてありがとう。俺、サンのことを忘れないから』

『私は何もしてないよ。魔法を掛けたのは主人の愛なのだから』

『そうだサン。一ヶ月前に、サンに良く似た金色の瞳をした猫が来たんだ。そいつはサンのことを探しているような感じで・・・それから色々「太陽の黒猫」のことを聞いたんだ。知り合いなんだろう？』

『ん？金色？聞き覚えがないが、伝えてくれてありがとう。さようならジャン』

私がそう言うと同時にトラックが動き始めた。

エンジンの振動が私には不快なものだったが、移動には便利なのでヘロンと途中まで一緒に過ごさせてもらうことにした。

トラックの中で私は考えた。

聞き覚えのない情報。金色の瞳。しかし、いっこうに答えが出なさそうだったので私は考えるのをすぐにやめた。

そして私は、私の主人を探す旅を続けた。

「最高級の豚だな」

そう言われると私はうれしくなった。

「そうだろう、当然さ」

私は仲介屋からお金を受け取り、そのお金で新たな家畜を買った。そしてある程度育った時にこの魔法の粉を一つまみ与える。

私は瞬く間にお金持ちになっていた。施設を綺麗にしたり、ジャンのご飯を豪華にしたり、新たな家畜を買ったり・・・。

しかし、私は牧場を改築しようとは思わなかった。いい家畜を作るためには、全部の家畜を平等に、そして全力で愛することが大切だと思ったからだ。

私には妻が出来た。そして子供が出来た。私は幸福を掴み取った。今でもずっと思う。全てはヘロンのおかげなのだ・・・。

ある日、私は牧場経営仲間に「ソーラーガイダンス社」と「サン・ブラックという美人な女性」についてを訊ねてみた。すると、

「ん？なんだ？そんな会社も人も聞いたことねえよ」

どの牧場関係者もそう答えた。私は変に思い、その社名を調べてみた。

「そのような会社は元々存在いたしておりませんが」

電話越しの女の人が綺麗な声で丁寧の説明してくれる。

私は私の手の上にある小袋を眺めた。小さい袋には、まだたくさん粉が入っていた。私は、きっとこれは魔法の粉なんだろうと思うことにした。

ジャンの連れてきた黒猫の魔法。私があげた鶏肉のお礼。

あのエメラルドの瞳が全てを物語っていた。

私はそう思うことにした。

第四話「思い出の炎」

雪というのは春先にはまだ大分積もっているものだ。

北国ならなおさらのこと、北風が道を駆け抜けければ、私はそれだけで毛が逆立ってくる。

足の裏の感覚はもうすでない。後ろを振り返れば、雪の上に着いた私の足跡が憎らしく感じる。

ふと目の前を見ると、大きな屋敷が一つ、他の建物にプレッシャーを掛けながら建っている。門から玄関まで数十メートルはある。私はひとまずその屋敷に避難することにした。塀を登り、庭に降りる。

そして玄関の扉の鍵を魔法で開け、扉を開く。中からの心地良い温風が私の体を包み込んだ。

屋敷の中は綺麗な模様の絨毯が敷かれ、多くの扉があった。

私は屋敷の中へ入るとまず、暖炉の在りかを探した。

広い屋敷だったが、暖かいほうを探したら暖炉はすぐに見つかった。

人の気配がしないのが多少気になったが、私は赤く燃える暖炉の前に座って体を暖めることにした。

いつの間にか、私は眠りに落ちていた。しばらくして目を覚ましてみると、暖炉のそばの腰掛けに腰の曲がったお婆さんが腰を掛けて寝ぼけ眼の私を見ていた。

「起きたようだねえ」

お婆さんが私に話し掛ける。

「どうやって入ってきたのかは知らないけど、まあいいわ。ずいぶん綺麗なエメラルドの瞳をしているわね。せっかくなんだから、ご飯でも食べていきなさい」

お婆さんは立ち上がると、杖をつきながら台所へと歩いていく。しばらくして持って来たのは湯気のたったラム肉のグリルだった。

「どうぞ、召し上られ」

私は遠慮なくラム肉を頬張った。が、猫舌の私は一度口から離し、冷めるのを待つことにした。その様子を見ていたお婆さんは微笑んでいた。

「あらあら、ごめんね。熱かったかしら」

お婆さんは腰掛に座り、私のことを眺めていた。

「食べながらでいいから、聞いてもらえるかしら？」

何かを話し始めようとしていた。

「私は昔、とても素敵なお爺さんと住んでいたのよ」

そう言うで一息おいて私の目を見て、今度は暖炉の火を眺めていた。

外はいつの間にか雪が降り始めていた。

粒の小さい粉雪はこの屋敷に積もっていく。

そして白い屋敷は、夕日に照らされて鮮やかなオレンジ色になっていた。

北国っていうのは乾燥している。そして寒いから暖炉を使う。

この街は昔から多くの火事があったのよ。

私の最愛の人は消防士だった。消防隊の隊長を務めていたわ。

「おい、今日もいつ火事があるかわからない。俺は署の方に行っている。家を頼んだぞ」

お爺さんはもう六十手前の老体だったけれど、まだまだ現役だったの。

お爺さんは結婚してから、家にあまり帰ってこなかった。

交際をしていた時は毎日の様に会って、愛を確かめたりしたのに。残念なことに、私は子供を産めない身体だったの。

広い屋敷に私は独りぼっち。私は寂しかった。でも、お爺さんが家を出るときに必ず言う言葉があったの。

「この家を守るのはお前じゃないきゃ駄目だ。よろしく頼む」

この言葉があったから、私は寂しさに耐えられた。どこかで彼と繋がっていられると思ったの。

でも、事件が起きたわ。

街に火事が起きるのは日常茶飯事だったけれど、相当規模の大きい火事が起きたの。

お爺さんは現場へ行ったわ。そして、帰らない人となった……。後で消防士仲間の人に教えてもらった話だけれど、お爺さんは建物の中に残った女の子を救出するために自ら火の中へ飛び込んだの。そしてボロボロになりながらも女の子を見つけ出し、三階のベランダから女の子を抱えて飛び降りた。お爺さんが下敷きになって女の子は軽傷で済んだわ。でも、お爺さんはその老体に負荷がかかりすぎて動けなくなってしまうたの。すぐに病院に搬送され、私も連絡を受けてすぐに病院に駆け込んだわ。

病室で、お爺さんはすでに昏睡状態になっていたの。

私は一晩中お爺さんの手を握っていたわ。

朝になって、お爺さんが奇跡的に意識を取り戻したの。最期の言葉を残すために……。

「お、女の子は……ぶ、無事か？」

私は涙を流しながら頷いたわ。

「よかつ……った。……。ウエイサ、愛し……。ている。……よ……」

最期の言葉に私は泣き崩れたわ。私の名前を呼んで「愛してる」って。本当に嬉しかったわ。

それから、私は女の子の病室へ行ったの。

「元気かしら？」

女の子は暗い表情で無言のまま頷いたわ。

女の子の家族は全員、この大火事で死んでしまったの。だから、私は一つの決心をしていた。

「名前は？」

「……ミーア」

「そう、ミーアはこれからお婆ちゃんと住まない？」

ミーアの目はまん丸くなって私のしわくちやの顔を見ていたわ。

「え？お婆ちゃんど？」

ミーアは初対面の私を見て何故だか安心した表情を見せてくれた。

「うん。私、お婆ちゃんと一緒に住む」

それからこの屋敷には私とミーアの二人で住むようになったの。

もう十年も前の話よ。

ガチャ。

扉の開く音と共に美しい女性が暖炉のある部屋へと入ってきた。

「おかえりなさい、ミーア。寒かったでしょう？」

「そうね、雪も降っていたから……あら、その猫はどうしたの？」

ミーアはすでにラム肉を食べ終えていた私を見て首を傾げる。

「昔話を聞いてくれたお友達よ」

お婆さんが優しい声で私を見ながら言う。

「そう、いらっしゃい黒猫さん」

ミーアは私の頭を一度だけ撫でるとお婆さんの方を向いた。

「そうだわ、明日の結婚式、この子も連れてきてよ」

「あらあら、気に入ったのね。わかったわ。私が連れて行くから。」

それより、明日の準備はもう大丈夫なの？」

「大丈夫よ。あとは火事が起きないことを祈るだけ。フラムったら結婚式よりも火事の方が大事だって言うのよ。どっかの誰かさんみたいよね」

二人でフフフと笑う。

どうやら明日、ミーアの結婚式があるようだ。そして、私もその結婚式に参加することがここで決まった。

「もう、冗談ばかり言っていないで早く寝なさい」

お婆さんが部屋からミーアを送り出し、私を見る。

「今夜は寒いから、この毛布の中で寝なさい」

厚手の毛布が私に渡される。私はお婆さんの言葉に甘え、その毛布に包まって眠ろうと思った。

外の雪はもう止んでいた。

白銀の煌く世界に赤は似合わないと思つた。

次の日、教会に足を踏み入れた私は、各所からの視線を浴びていた。

「あら、迷い猫かしら？」

「結婚式に黒猫なんて縁起が悪いわ」

「なんでもお婆様が連れてきたらしいわよ」

など大変失礼なことを言われたが、私は特に気にしなかった。私が気にしたことといえば、ミーアの相手のフラムという男がまだ教会に到着していないという事だった。

「大変だ！ 町外れの民家で火事だ！」

背の高い男が教会に飛び込んできた。

「そんな……。あ、フラムは大丈夫なの？」

ミーアの顔が真っ青になる。

「どうやら、中の人を助けるために火の中へ飛び込んだらしい！」

ミーアはその場にしゃがみ込んでガタガタと体を震わせていた。

自分の記憶に対しての恐怖なのだろうか、それとも愛するフラムの危険を感じたのだろうか。その様子を見ていたお婆さんがミーアに駆け寄る。

「……。フラムを信じましょう」

お婆さんはミーアを抱きしめながらそう言った。

気付いたら私は走り出し、教会を飛び出していた。

町外れの家はすぐにわかった。遠くからも黒い煙が出ているのが

わかったからである。

家は炎に包まれていた。

私は迷わず家に飛び込んだ。

「おい、なんだあの猫！あぶねえぞ！」

消化中の消防士が叫んだが、私は気にも留めなかった。

家の中はむせ返るほどの熱気に帯びていた。人間では助からないんじゃないかと私は思う。私は人の気配を探りながら家の中を進んで行った。

二階の奥の部屋に二人の人間がいた。

一人は消防士、一人は家の人だろうか。片方がフラムだということとすぐにわかった。

未だ二人は生きていた。が、家の人足は怪我しており、歩くことが出来ないでいる。

「な、なんだ？猫？」

フラムが私を見る。息をするのも辛そうな表情である。

私は仕方なく魔法を使うことにした。

エメラルドの瞳が光り、部屋中を覆う。

すると、家を覆っていた炎は全て実体ではなくなり、部屋の温度は急激に低下していった。

「ん？苦しくない。熱くもないぞ？」

未だ炎は燃え盛っていたが、それはあくまで虚像であり、いずれ自然に消えていく魔法だなんてことを私以外誰も知らない。

フラムは、これはチャンスと思ったのか、家の人を担ぎ玄関へと急いだ。

私はその様子を確認してから、ゆっくりと家の外に出る。

奇跡的に二人共軽傷ですみ、フラムは現場から教会までそのままの格好で直接むかった。

ちょうど雪が降ってきて、それと同時に家の炎は静かに消えていった。

結婚式は意外とスムーズに執り行われた。

教会に飛び込んできた新郎は、早急に着替えを済ませ、息を切らせながら新婦の横に立っていた。

私はひっそりと教会に忍び込み、その光景を見ていたが、ミーアは満面の笑みで、とても美しかった。白いドレスはまるで雪のように優しく、ミーアの顔は炎の様に紅潮している。

お婆さんも嬉しそうに笑っていたが、その目には涙を浮かべていた。昔の自分でも見ているかのような眼差しである。

ここに、二人の若人は浅い口づけを交わし、結ばれることとなった。

式の後、お婆さんが私の姿を探していたのはわかったが、私は一声鳴いただけで教会を後にした。

「ありがとう・・・」

最後にお婆さんの声を確かに聞いて、私はまんざらでもなかった。白銀の煌く世界に赤は似合わない。

私は再びそう思って、主人を探す旅を続けた。

「あの時、確かにエメラルドの瞳をした黒猫が立っていたんだ」
フラムは私に強調して言った。

「きつとあの子に間違いないわ。あの子があなたを助けてくれたのよ」

私は優しい声でフラムに言う。

「俺もそう思うよ、義母さん。あの猫の瞳が光ったと思ったら、炎が熱くなくなったんだ」

「もう、フラムったらそればかりね」

ミーアが隣の部屋からお茶を持ってやってきた。

「大事なことよ。フラムの話が本当なら、あの子のおかげで、あなたたちは無事に結婚できたのだから」

両者はお互いを見つめて頷きあう。

私は二人に昔あった出来事を一つだけ話し始めた。

私はあの黒猫の瞳を以前どこかで見た覚えがあるの。

お爺さんがまだ生きていた頃、街で私が歩いているところに一人の少女が道端で泣いていたの。

「どうしたの？迷子かしら？」

私が優しく少女の頭を撫でると、少女は私の顔を見てこう言ったわ。

「おうちにかえれなくなっちゃったの。すこしやすめばへいきだとおもうけど、さむいし、おなかすいたし、さみしいし・・・」

少女は鼻声で私にそう言った。

少女の瞳はエメラルドに輝いていて、とても美しかった。本当に印象的な目だったわ。

「じゃあ、私とどこかでお茶でも飲んで休みましょ？」

私がそう言うのと少女は黙って頷いたわ。

私達は近くの喫茶店でお茶を飲むことにしたの。

「おいしい？」

私が聞くと、

「・・・うん」

少女は私の目を見て頷いたわ。

しばらくすると、少女がおもむろに立ち上がったの。

「もうだいじょうぶ。わたし、かえらないといけないから」

そう言うのと喫茶店のドアの所まで歩いて行って、

「ありがとう」

の言葉だけを残してどこかへ行ってしまった。

あの少女のエメラルドの瞳と、あの黒猫のエメラルドの瞳の印象がとても似ていたから思い出しちゃったわ。

あの子、元気かしら・・・。

「きっと、その少女があのだ黒猫だったのかもしれないね」
ミリアが笑顔で言う。

「それはロマンチックな話ね、まるで魔法の世界だわ」
フフフと三人で笑う。

あの黒猫、元気かしら・・・。

第五話「エメラルドの瞳の魔女」

砂というのは目に入ってくるから嫌いだ。

寒いのは嫌いだが、暑すぎるのも考えものである。

この街は枯れている。

ちよつとした風で飛んでいってしまいそうなほど枯渇している。

水に飢えた街には、あまり人が住んでいなかった。

大通りの活気のなさは、歩いていて悲しくなってくる。

「あら、綺麗な瞳ね。あなたが『太陽の黒猫』かしら？」

私をそう呼ぶ品のある女性が前方に一人。金髪でサラサラな長い髪の毛、全てが下僕とでも言いたそうな野心に満ちる赤い瞳。三十台半ばあたりの肌の張り、首の皺。暑い、いや灼熱の太陽が照っているというのに黒いローブを身に纏っている。こういう所では普通白が定番なのだが。おそらく魔女なのだろう。そういう気配は消されているが、私には感じる所がある。

「私の家へいらっしゃい。あなたにおもしろいお話を聞かせてあげるわ」

女性はそれだけを言うと、私の返事は待たずに身を翻して歩き出していた。

私は見に覚えのない女性に疑問を感じたが、私を知るという女性に興味を惹かれ、用があるという女性に従って、ついていくことにした。

女性の家の外見は例外なく他と変わらず砂に支配された風貌だ。

しかし、内装は違っていた。別世界へ来たような豪華な部屋の数々。というか、あの外見からこの広い内装は想像がつかない。

「そこに座りなさい。今お茶を持ってくるわ」

女性は豪華なソファに深々と座り、そう言った。

隣の部屋から魂の抜けたような目の女が入ってきた。

お茶を持って来たのはその女だった。

私の前に無言で紅茶が置かれる。

「お砂糖はいくつ？それともレモン、いやミルクかしら？」

女性の質問に対して私は首を振る。

「あら、ストレートがお好みなのね」

女性は女性自身の紅茶に砂糖をドバドバと入れてカップを持ち、一口飲む。

「さて、自己紹介がまだだったわね」

紅茶のカップを置いて、私の目を見る。

「私の名前はチャイム・リドル・グラゼセン。リドルと呼びなさい。この横にいる女は私の下僕の一人、レアンというの」

レアンは一度だけ軽い会釈をした。

「私はカレイド・サン・クルジャ―。ご丁寧にどうも。私に話したいことは？」

人間の言葉で私は端的に挨拶をした。

「二十年ほど昔の話よ。あなたと同じ、エメラルドの瞳を持つ魔女のお話。聞きたいかしら？」

リドルは意地悪そうに私を見下す。

「ぜひ」

私はそれだけを言って、彼女の赤い瞳を見上げた。

彼女の名前はブルーム・レイン・クレセント。

この世には魔法使いを育てるための学校があるのは知ってるわね？もちろん世の中には公になっていないけど。

その学園のクラスメイトで私のライバルだった人の話よ。

彼女の瞳はエメラルドに輝いていて、いつもいつも私よりも一つ先を歩いていたわ。

テストでも実技でも正式に彼女に勝ったことは一度もなかった。

でも、私だって諦めないでコツコツと努力を重ねたわ。

「次の実技、あなたには負けないから！」

実技のテストの日、私は彼女にそう言ったの。

「うん、私も全力でお相手するわ」

彼女は優しい微笑みで私にそう言ったわ。何も嫌味のこもってない声で。

結局、私は彼女に負けてしまった。

「こ、今回は私の負けよ、次は負けないんだから」

「うん。また一緒に頑張らしましょうね」

全く相手にされていない様子。私は毎回、暖簾に腕押し状態だった。それが悔しかったの。だから認めさせたかった。私という存在を。

でも、それは私の一方的な勘違いだった。

ある日のテストを彼女は体調不良で休んだの。そして彼女は次の日に私が何かいう前にこう言ったわ。

「今回は私の負け。体調管理も出来ないなんて話にならないわよね」
私は今回のテストを勝負にするなんて一言も言っていなかったの。

でも彼女は私という存在を認識していた。その言葉にはまるで魔法がかかっているかのように私の奥深くに突き刺さって、私はどこか安心していった。

彼女はとても優しい人だった。嫌味に聞こえてもおかしくない言葉を発しても、全くそう感じさせないのは彼女の性格からだと思うわ。

喜怒哀楽が激しいけれど、友達が多く、成績も良かった。

そんな彼女にも好きな人がいた。

その人は一つ年上で、学園でもトップクラスの魔法使いだったわ。私も彼のことが好きだった。でも・・・それは叶わなかった。

彼は彼女のことを好きだったの。相思相愛ってやつね。

私は彼女に負けっぱなしだった。

学園を卒業してから彼女から一ヶ月に一度届く手紙が正直憎ら

しかったわ。私の事を認識してくれているのは嬉しかった。でも、彼女は卒業してからも様々な功績をあげていて、一方私はいつまでも「少し腕の良いだけの魔女」。その手紙を彼女が嫌味で送っていない、むしろ好意で送ってくれているのはわかっていたけれど、やっぱり悔しかったの。

でも、ある日を堺に彼女からの手紙が届かなくなった。憎らしかった手紙も、来なくなると寂しくなるものなのね。

そして、どういうわけか、私以外の人達は彼女が最初から存在していなかったかのように、

「レイン？誰だったかしら？」

なんて言うの。それは彼女の愛した彼にしても同じだったわ。

そしてしばらく経つと旋風が吹き抜けていくように「太陽の黒猫」の噂を聞くようになった。エメラルドの瞳の猫。

私は待っていたわ。あなたがここに来るのを。

ずっと楽しみにしていた・・・。

リドルが私の顔を再度、真剣な面持ちで見直す。

「あなたがレインね？」

私は何を言っているのかさっぱりわからなかった。

「私はサンだ。レインではない」

しかし、リドルは疑いのない赤い目で言う。

「いいえ、あなたはレインよ。あなたはただ呪いを掛けられているだけ。あなたを恨んでいる人が誰だかわからないけど、絶対そうに決まっているわ」

私はこの戯言を言ってくる魔女に呆れた。

「だから、違うと言っている。私はただ主人を探して旅をしているだけだ」

リドルはレアンに紅茶のおかわりを持ってきてもらい、再びドバドバと砂糖を入れていた。

「・・・主人？それは誰のことかしら？」

私は間をあげず、主人の名前を思い出す。

「ラフィス。私は彼女のことをそう呼んでいた」
途端にリドルが険しい顔をする。

「ラフィス？それって・・・」

リドルはレアンを手招きし、耳打ちをする。

「ラフィスって、伝説の魔女のことじゃない」

そしてレアンがどこからか分厚い本を持って来た。その本を机に広げる。

「見なさい、ラフィス。西暦1984年、彼女は今も伝説となっている禁術を完成させてしまった」

私は机に乗り、本を覗き込む。

「空間転移の魔法。異空間を移動することで、一瞬で他の場所へ移動することができる魔法。この魔法は危険だったわ。魔法という存在を世界にバラしてしまうことに繋がりがかねない未完の魔法だったから」

私はリドルの言葉を真剣に聞いていた。

「自分の認識している座標の場所にしか移動出来ないとはいえ、移動先に人間がいるかもしれない、誰が見ているか予測がつかない。はたまた、久しぶりの場所へ移動しようとしたら、そこにはすでに建物が建っていて、移動しきれずに異空間で命を落としたモノまでもでた。ラフィスはその危険な魔法を開発してしまったために処刑された魔女よ。探す意味のない、もうこの世にはいない魔女なのよ」
一体このリドルという魔女は何を言っているのだろうか。

私はしばらく何も考えられなかった。私はしょっちゅう空間転移の魔法を使っていた。禁術とも知らないで。私が禁術を知らないなんて、おかしい・・・。

記憶を探ってみる。

記憶・・・。

靄の掛かった記憶がいくつもあった。

ラフィスの顔が思い出せなかった。おぼろげな・・・

『ちよっと出かけてくるね』

確かに彼女はそう言った・・・はずだ。

「サン、あなたは一体何者なの？」

私は何がなんだかわからなくなり、気付くとリドルの家を飛び出していた。

「ちょ、ちよっと・・・！！」

リドルが何か言っていたが聞こえなかった。

必死に走った。

どこへ向かっているのかなんてわからなかった。

そして枯れた街には私の存在を認識してくれる人間がほとんどいなかった。

空間転移。

私はイギリスの小さな町に帰ってこようとしていた。

全ての始まりの、ラフィスの屋敷で何かがわかる気がしていたからかもしれない。

薄暗い路地裏に光の輪が生まれたと思いきや、ふわっと私が現れる。

すると、私の目の前には黒い猫が座っていた。まるで、私がここに来ることを予測していたかのように、当然といった面持ちで私を見ている。

以前、牧場にいた猫に教えてもらった例の金色の瞳を持つ黒い猫であると、私は瞬時に感じ取った。

その猫は人間の言葉で私に話しかけてきた。

「よう、やっと戻ってきたのか」

金色の瞳を持つ黒猫は私のエメラルドの瞳を確かに捕らえていた。

第五話「エメラルドの瞳の魔女」(後書き)

ここから佳境に入っていくので次に続いてまいります。

第六話「真実の太陽」(前書き)

第五話からの続きになります。

まだ読んでいない方は、そちらを先に読むことを御奨めいたします。

第六話「真実の太陽」

「どうした？鏡でも見ている気分なのか？」

金色の瞳の黒猫がボーっとしていた私を見つめる。

「私は……。いや、お前は何者だ？」

いつだったか金色の瞳を持つ猫が私を探しているという情報を聞いたことがあった。

「俺か？そうか、そうだったな……。俺はクラウド。お前とは兄妹みたいなものだ」

私に兄妹？そんな記憶は存在しない。

「知らない。私に兄妹なんていない」

「そっか。まあ、なんでもいいや。サン、お前を迎えに来た」

クラウドは私の名前を知っていた。私は訳がわからなかったが、私を認識してくれる存在が目の前にいることで、どこか安心していった。

「わ、私は主人を探さなければならない」

「主人？……。ああ、主人な。ククク……。わかっているよ。じやあ、その主人の情報も教えてやるからついて来い」

私はクラウドに馬鹿にされているんじゃないかと思った。しかし、クラウドはくると向きを変え、さっさと歩いていってしまった。

私はクラウドの後を歩いた。クラウドは私の行こうとしていた所に行くようだ。

始まりの屋敷。

主人の家。

そして、何かが終わろうとしているのを私はどこかで感じていた。

クラウドの後を追っていた私は驚いた。

「さあ、サン。まずは俺のご主人に会ってくれよ」

屋敷の客間には人間が・・・いや、一人の外見の若い魔法使いが座っていた。

「おかえり、サン。元気だったか？」

魔法使いが私を見る。

「相変わらず綺麗な瞳だ」

ふと魔法使いが一つの手鏡を取り出し、私の前へ突き出す。

「見てみる。今この手鏡には何が映ってる？」

そこには私が映っていた。当然のことである。

魔法使いはその手鏡を持ち、私に背を向けて数歩歩いていく。

「サン、今俺を見ているだろう？」

言っている意味がわからなかった。私は言い当てられたのが癪にさわったので、クラウドを見た。

「今はクラウドを見ているね」

この魔法使いには背中にも目がついているのだろうか。

「サン、この手鏡にはサンの見ている光景が映っているんだ」

そんな馬鹿な話があるはずがない。

「本当さ。サン、旅は楽しかったかい？」

私は黙って魔法使いの顔を見ていた。

「おいおい、喋ってくれないと何もわからないぞ？」

「主人・・・」

「ん？」

「私の主人は・・・どこだ？」

私は力強く魔法使いに訊いた。

「主人？ ああ・・・くくく、あっはっはっは」

急に魔法使いは堪えきれずに笑いだした。

「主人な。主人か」

馬鹿にした言い方。

「お前の主人はいない」

唐突な魔法使いの言葉を私は聞き逃す所だった。

「え？」

「お前に主人なんていない」

私には主人が・・・いない？

「お前は魔女なんだよ」

私が・・・魔女？

「俺が呪いをかけたんだ。忘れたのか？」

呪い？

記憶？

手鏡？

「わ、私は・・・」

主人？

エメラルドの瞳？

魔女？

「私は何者なのだ?!」

魔法使いの顔から笑みが消えた。

「俺の名前はグルーヴ・スノウ・ラミレミア。呪術を研究する魔法使いだ」

今の私に魔法使いの名前や目的なんてどうでもよかった。

「れ・・・サン、旅は楽しかったか？」

旅？旅。旅をした。長いこと。私は旅をしてきた。

「旅……。色々な人を見てきた。色々な人の感情を見てきた。喜び、怒り、哀しみ、楽しみ。全ての感情を見てきた。人間は哀れな生き物だったけど、それと同時に素晴らしい生き物だった」

私は無意識に言葉を発していた。

「そうか。それはよかった」

スノウが私の目の前まで来てしゃがんだ。

「望みは叶ったか？レイン」

私の瞳を見て優しく言う。そして、クシャクシャと私の頭を撫でた。

「レ……。イン？あ、ああ、ううううう」

酷く頭が痛くなってきた。

スノウは相変わらず私の頭を撫でている。

次の瞬間、私の体の中が熱くなり、おびただしいほどの光が部屋を包んだ。

私は魔女。魔女の姿に戻った。

全ての記憶がよみがえってくる。

「おかえり、レイン」

スノウが私を強く抱きしめる。

「……。ただいま、スノウ」

そして、ただ唇を重ねるだけの浅いキスをすませる。

そう、私は魔女だった。

私はブルーム・レイン・クレセント。伝説の魔女ラフィスの血を引く魔女。

「スノウ、ありがとう。私の我儻を聞いてくれて」

「いいや、レインがそうしたかったのに、反対する意味がないだろ

「？」

クラウドが私の足元へやってきた。

「レイン。よかった、思い出したんだね？」

「クラウド、ずっと私を見ていてくれたのね？ありがとう」

私はクラウドの頭を優しく撫でた。

「クラウド、妹がいなくなっちゃって残念だったな」

スノウが意地悪そうにクラウドに言う。

「う、うるさい。俺は無愛想なサンよりもレインの方が好きだからいいんだ」

私は微笑む。

「楽しい旅だったわ。今日は存分に旅の話をしてあげるわね」

私は笑顔でスノウとクラウドをこのエメラルドの瞳で見つめた。

「楽しみにしているよ」

スノウは爽やかに清ました笑みで私の瞳を見つめていた。

寒空の太陽が屋敷を暖かく照らしていた。

雲ひとつない空。

どこまでも澄んでいる青が私には眩しかった。

第六話「真実の太陽」 （後書き）

題名に真実と書いておきながら、特に予想通りの真実しかまだ語られていないので、もっと深い真実は次話で語られる予定です。

第七話「終わりの雨」(前書き)

エピローグです。

第七話「終わりの雨」

全ては私の望みだった。いや、究極的な私の我儘だった。

『天使の雨』と魔法使い達の間で慕われていた私には、一生のうちの一つだけやっておきたいことがあった。

目立たない姿で、人を助けたい。世界中の人々を見てみたい。

私の恋人のスノウにこのことを相談したら彼はこう言った。

「なら、クラウドのような姿になって、世界を旅してみなよ」

その言葉にクラウドの金色の目が光った。

「俺みたいな姿？ なにかと不便だぞ？」

「それでも、レイン自身でいるより目立たないし、レインだっていうことがわからないだろ」

私は、それはいい考えだと思った。自分自身がクラウドの様な黒猫に魔法で変化する。

でもそれにも問題がある。私の性格上、いつ自分の正体をばらししてしまうかわからない。なにせクラウド曰く猫はなにかと不便らしいから。私は隠れて人助けをしたいのに、それではできなくなってしまう。

「俺が呪いをかけてやる。適当な記憶を刷り込ませ、レインとはある意味逆の感情を持つ黒猫にしてみせるよ」

呪術を研究していたスノウは目を輝かせて私に言った。

彼の言葉を、彼の目の輝きを私は信じることにした。

「いつなにかあってもいいように、クラウドを密かに見張らせる。もちろん四六時中じゃないが。色々と君が動きやすいようにクラウドには動いてもらう。そして、時が経った時、またこの屋敷にもど

つてくるように仕掛けておこう。私はこの屋敷から二枚の手鏡によって監視しているよ。クラウドと、そして君を。クラウドとは随時連絡を取り合って、こちら側から指示を出せるようにしないとな。あと、適当な記憶を刷り込ませないといけないな。どうしようか。ラフィスの名前でも借りるか？」

とんとん拍子でスノウの話は進んで行った。

「ラフィスはどうかなあ」

私とクラウドが声を合わせて言うのと、

「いや、インパクトがあっついと思うんだ。その記憶もおぼろげにしとけば大丈夫さ」

と言いきり、いきなり、

「そうだ、君の名前はサンにしよう！君は雨。そしてもう一人の君は太陽だ。君が太陽の間、みんなにとっての雨の記憶は『太陽の黒猫』というものになる。君の呪いが解けた時点で再び『天使の雨』の記憶に戻るって仕組みだ」

スノウは着々と準備を進めてくれた。

そしてその計画はついに実行へと移された。

「クラウド、妹が出来た気分じゃないのか？」

スノウは金色の瞳を持つ黒猫のクラウドに訊く。

「そんなことねえよ。けど、なんか雌猫としてフツーに可愛いよなへへへと笑って返すクラウド。」

「妹じゃなくて恋人か？それじゃあお前の行為はストーカーだな」

「ばっ！い、妹だよ」

「ははは、とにかくお前の働きが大事だからな。頼んだぞ」

「ふう、またこんな仕事か・・・まあいいか、任せろ」

後から聞いた話だとそんな二人(?)の会話があったらしい。

そして私は今までの記憶を失い、サンとして旅をしてきた。

私にはラフィスの血が流れている。私は空間転移の魔法を世界で

唯一、完璧に使いこなせる魔女だった。知らない場所にも転移可能であり、人間に見つかる可能性を極めて低くする術を持っていた。そうして私は世界を飛び回っていた。

いつの間にか多くの歳月が流れた。

枯れた町で、なぜカリドルにだけは呪いが中途半端にしか効いていなかった。恐らく私の送っていた手紙のせいだと思う。それが若干の誤算だったらしいが、それをうまく利用して、結果的には屋敷に帰ってこれたわけだ。

そして私はスノウに頭を撫でられるということまで呪いを解いた。

人間はとても愚かだった。欲に溺れ、第一に我が身の保身を考える。

それでも・・・独りぼっちでも光を見出す人間も、愛する他人のため小さな石に命を掛けた人間も、動物を心から愛していたのに一番愛した動物を犠牲にしてしまった人間も、火の中に自分の居場所を求める人間とそれを一心に待つ人間も、みんな精一杯生きていた。

私はまた旅をしたいと思った。

私も欲にまみれた人間と変わらないのかもしれない。

それでもかまわない。

他人からなんと言われようが、私の生き方は私が決めるものだから。

それが人間らしいと思ったから。

だって、私は人間が大好きだから・・・。

ありがとう、スノウ。クラウド。

そして『太陽の黒猫』

いや、もう一人の私

いや、サン。

本当にありがとう。

『太陽の黒猫』 E N D

第七話「終わりの雨」（後書き）

実は、この作品はとある作品の続編というか、スピンオフだったりするので。

つまり、レインの生い立ちを記した小説が存在するわけです。

設定はほぼ決まっているものの、まだちゃんとした形になっていないので、後々連載できたらいいなと思っています。

最後まで読んでくださってありがとうございました。

ずうずうしいようですが、感想などなど頂けたら、泣いて喜びます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2760h/>

太陽の黒猫

2010年10月8日10時11分発行